

すりて粉となし、

○くるみの剥たるを、熱湯に入れて、細き竹串の先にて皮をむきさりて、三十ばかり

黒ごまと、くるみを入れて、美生をすりおろしたるを少し加へて、よく煉りて、つかふべし、



▲世界第二の大時計 米國ワイラデルファイアの公會堂に此程据附けたる大時計は時辰表の面直径二十五呎にして分針は一分毎に一呎の距離を進む此時計は地上三百六十呎の所に在りて其價は六万圓實に世界第二の大時計なり第一の大時計は白耳義メシユリン市の聖ロムホルド寺院に在るものにして其大さは此時計の凡そ二倍なりと云ふ



無聊吟集短歌

鹽野 奇零

初秋の夕風冷し沖の船
ミルク呑む子に泣かれけり秋の暮
買ひ足した酒にまぎれて秋の暮
日に幾度變るながめや秋の山
芒野や破れし笠の捨てゝあり
椽側に草紙干す子や小春の日
猫の子の寝たり起きたり小春椽
糸つけて蜻蛉放ちぬ秋日和
噓して寝る氣になりぬ秋の月
我一人手紙書く夜や虫の聲
蝗取る女の群や赤襷
早稻刈りて今朝の祝ひや小豆飯
小春日や襷がけして障子張
演習の騎馬三百や秋の野に
樺太に菊の薫りや天長節

短歌

菅原櫻心

美くしき物みなうつるよき目して此世送らむ

歌のみ友よ

萩桔梗尾花すゝきに秋たけて廣野に寒うこほ

ろぎの啼く

園生よき千草擗に秋虫は秋を讃じて歌つゝる

らし

秋風に高粱ゆるし南椽の夢を破りて雁鳴さわ

たる

ぬば玉の暗の船路は燈臺に我世の道は愛の

光りに

森 白 雪

ひやゝかう秋の夕日の片てりにこぼれ初め

たり白萩の花

天高う澄み液りたる夕晴れを雁ひとつ行く

秋のいろ哉

秋花の眞白き莖に塵を占めて秋の空見る我

こゝろ哉

愛 子

つかねたる野菊なかばを分ちては黙しゝま

ゝに別れつる日や

月の夜を歌女こほろぎ絃しめて秋の哀れを

かなでぬる哉

死の眞洞めぐりてこゝに來しものか身に泌
み渡る初秋の風

竹 島 芙蓉

秋なれや花野の暮れを物思ひ行く少女子に

ちぎれ雲とぶ

夕月に片頬そむけて物おもふ少女の鬢を吹

く秋の風

秀 子

さすらひの我身に似たり秋くるゝ夕べの雲

のちぎれくゝに

夕鐘や又思ひ出のつらかりき萩もこほるゝ

秋の夕窓

三 井 白 梅

おはれなる巳が宿世 月見れば月も涙にし

めりても見ゆ

思ひ兒は遠き河原に石つむか夕日淋しき初

秋の窓

桔梗さく野中に等きし胡蝶塚又も亡き兒を

まぼろしに見て

起 雲

思ふこと果さず歸るものゝふの鐘のほさきにすこし夕月
宵寒やをぐらさ燈火かきたてゝ遠つみ程の軍記ひもとく
小さなる月の室戸に思ひ秘めその冷かき胸守りぬれ

* * * * *